様式第２号

平成２７年度　　地 域 貢 献 特 別 研 究 費 実 績 報 告 書

平成２８年３月３１日

申　請　者	学科名	認定看護師教育センター	職 名	特任准教授	氏 名	佐田　佳子
調査研究課題	大学に糖尿病相談室を設置した効果（３）					

調査研究組織		氏　　名	所属・職	専門分野	役割分担
	代表	佐田佳子	認定看護・特任准教授	糖尿病看護	総括・糖尿病相談室運営
	分担者	高橋　吉孝	栄養学科・教授	病態栄養学	医学的なアドバイス
		入江　康至	栄養学科・教授	内科学	医学的なアドバイス
		川上　貴代	栄養学科・教授	栄養教育	栄養についてのアドバイス
		平松　智子	栄養学科・准教授	臨床栄養	料理教室
		田淵　真愉美	栄養学科・講師	臨床栄養	料理教室
		谷口　敏代	福祉学科・教授	介護福祉学	療養相談のアドバイス
		沖本　克子	看護学科・教授	小児看護学	療養相談のアドバイス
		岡崎　愉加	看護学科・准教授	助産学	療養相談のアドバイス
		住吉　和子	看護学科・教授	慢性期看護学	療養相談
		杉島　訓子	認定看護・特任助教	糖尿病看護	療養相談
		高林　範子	看護学科・助教	基礎看護	療養相談
		浅井　美穂	看護学科・助教	慢性看護	療養相談
		料治　三恵	岡山大学病院・認定看護師	糖尿病看護	療養相談

調査研究実績の概要

（地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）

1. 「糖尿病相談室」の実際

1) 糖尿病相談室の利用者

7月から3月までに14回の相談を実施し、利用者は、個別相談延べ人数28名（男性7名、女性7名）、料理教室参加者12名、体操教室の参加者10名、出張糖尿相談室の参加者27名で、**合計77名**であった。

2) 相談方法

(1) 相談場所については、総社市保健センターと岡山県立大学の2つの場所を設定した。また、希望者には訪問看護師による訪問相談も可能とした。

(2) 相談日は、平成26年7月から平成28年3月の1～2回/月とし、予約制で療養面接を実施した。

(3) 利用者の目的を確認し、目的を達成できるように相談室を運営した。希望者には、血糖測定に加え、過去1,2ヵ月の平均血糖値を反映する指標であるHbA1c値を測定し、健康管理への動機づけとした。面接は、解決志向アプローチで行い、面接記録を毎回作成した。医療機関からの紹介については、書面で相談内容を報告した。

(4) 糖尿病を自己管理する上で必要な知識の提供を行うとともに、利用者が生活の中に取り入れられそうな生活改善策を共に考えていった。

(5) 痛み測定を行うことで、相談時には話されない身体の些細な変化を把握することができた。

調査研究実績の概要 （地域貢献への反映を踏まえて記述のこと）	3)体操教室の実施 平成28年1月19日に総社市保健センターにて、太極拳とヨガを取り入れた体操教室を行った。参加者は10名であった。参加後の反応として、「自宅でも継続して行いたい」という声が聴かれた。 4)料理教室の実施 平成28年2月26日に栄養学科の主催で料理教室を企画・実施した。参加者は12名であった。栄養バランスを考えた、低エネルギー・減塩・油を控える料理を参加者とともに調理した。参加者からは、「自宅でも是非作ってみたい」、「機会があればまた参加したい」という声が聴かれた。希望者には、血糖測定に加え、HbA1c値を測定し、健康管理への動機づけとした。 5)出張糖尿病相談室の実施 総社市の特定健診を受診している人でHbA1c値が基準値よりも高い人は、40歳以上が45%、50歳以上が59%、60歳以上が61%である現状を受け、20～30歳代の若い世代に自分の健康に関心を持ってもらうことをねらいに、子育て世代の母親への血糖測定や情報提供を行う出張糖尿病相談室を総社市と協力し実施した。平成27年9月と10月の2回実施し、27名の参加者に対して、血糖測定とHbA1c値を測定した。 6)総社市主催の健康フェスティバルへの参加 平成28年2月11日に行われた健康フェスティバルには、血圧測定・握力測定・血糖測定HbA1c値、血管年齢測定のブースを設定した。7歳から83歳のあらゆる世代の人が興味を持って来場した。食後血糖高値やHbA1c高値の参加者がおり、糖尿病を強く疑われる人には受診を勧めるとともに、医師会のブースを紹介した。このフェスティバルで得た情報は市役所に情報提供した。 2. 今年度の課題 ①糖尿病相談室を複数回受講している利用者がいるが、相談の目的が明確でない利用者の対応に戸惑うこともあったが、利用者と一緒に運動する等、相談室で過ごす時間を有意義にしていきたい。 ②糖尿病相談は医師の紹介もあるが、ほとんどの利用者は自分の希望で来るため、検査データなどの情報に限界がある。しかし、相談室で利用者が問題と感じていることを中心に解決方法を考えることで気持ちが楽になるという効果はある。気持ちが楽になることで、生活の中で改善できる方法に取り組むなど、治療を受けることへの意欲に繋がることが期待できる。 ③利用者の主治医や保健師と連携の強化により、さらに相談の有効性が高まることが予測されるが、個人情報保護の問題もあるため次年度の課題としたい。

成果資料目録	日本看護科学学会学術集会で発表のポスター